

ここがポイント！授業づくり

京都府丹後教育局
学校教育担当
令和2年12月発行
授業力UP研修7

この資料は、教職経験1～6年目（ステージ1）の先生方を主な対象として作成しています。他のステージの先生方にとっても、御自身の日々の授業実践を振り返っていただくきっかけとなれば幸いです。

今回のテーマ

「深い学びの視点からの授業改善」

「深い学び」の定義は下のように示されていますが、その具体的な姿は様々です。場面に応じてどんな姿であれば「深い学び」が実現しているのかを明確にする必要があります。その際には「浅い学び」と比較するとイメージがしやすいかもしれません。児童生徒が「分かった」「なるほど、こういうことか」と納得するような学びを追究していきましょう。

【「深い学び」の視点】

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えをもとに創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか。



～「見方・考え方」とは～

各教科等の「見方・考え方」とは、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方のことです。

「見方・考え方」は、新しい知識・技能を既にもっている知識・技能と結び付けながら社会の中で生きて働くものとして習得したり、思考力・判断力・表現力を豊かなものとしたりするために重要なものです。

「見方・考え方」は各教科等の学習の中で働くだけでなく、大人になって生活していく上でも重要な働きをするものとなります。例えば、社会生活の中で、データを見ながら考えたり、アイデアを言葉で表現したりする時には、学校教育を通じて身に付けた「数学的な見方・考え方」や、「言葉による見方・考え方」が働いています。

学習指導要領に「主体的・対話的で深い学び」について「1回1回の授業で全ての学びが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、（中略）実現を図っていくものであること」と示されています。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める上でも、単元構想をすることは大切です。



習得した知識や技能を活用・発揮する場面を設定しましょう。

児童生徒が学ぼうとしている内容について、単に覚えるのではなく、自分で考え、知っていることとつなぎ合わせていくことで「深い学び」となります。習得はもちろん大切ですが、習得したことを活用・発揮する場面を単元の中に仕組んでいくことが大切です。

課題設定（問い）を工夫しましょう。

一問一答の課題では「深い学び」は生まれません。一人一人の児童生徒に「どうしてだろう」「なぜ」と問い続ける状況を生み出すことが大切です。個別の知識のみで考えるのではなく、複数の知識をつなぎ合わせて考える状況を生み出すような課題設定をしましょう。

児童生徒が考える際に着目すべき点や考え方を示しましょう。

児童生徒が各教科の「見方・考え方」を働かせることができるように助言しましょう。例えば、「ここに注目するとよい」「こういう考え方で考えてみよう」などと、児童生徒が自分で考えるための手掛かりを示すことが大切です。